

プロローグ (五十年目の謎解き)



「公立高が、二年連続夏の決勝に行くなんて奇跡ですよ。センバツにも出たんですよね。尼西高の強さの秘訣は何ですか」

兵庫県高野連の会合で、若い指導者が、会長のジンに声を掛けて来た。

「尼西高をモデルにチーム作りをしたが、いまいち強さの分析が出来ないのよ」ジンは正直に応えた。

「会長自身が選手で甲子園に出たのに？」

不思議そうな顔が返って来た。

「創立五年目の尼西高が、なぜ九人で甲子園に行けたのか。

五十年前の五期生にどんな力があつたのか。

どうして尼西ミラクルが生まれたのか。

その謎を解いて、後進や後輩に伝えるのも、使命だろう」

中学のバッテリーで、今は義弟（妻の妹婿）の彼が、高校時代に劣らぬ情熱の顔をしてくる。彼の手にした珈琲はとっくに冷めていた。

「謎解きのカギはトビさんだろうな。七人が大庄西中だから。何か仕掛けがある筈や」

「お前、主将やから先生に電話してよ」

私は、御年九十歳の大庄西中学の恩師、トビさんにランチを約束した。当日、ジンに気合が入っているのは、準備したメモで分かった。彼はさっそく、謎の核心に迫った。

「先生は、七人全員が西高に入れば、甲子園に行けると思われたのですか」と切り出した。

「ふーん、甲子園は考えてなかったな」

先生は天井を見た。暫くして、

「ただ、お前達がまとまれば、H高と闘える公立高が、出来るかも知れんとは思ったな」

中学球界の名将から、思いがけない校名が出た。無敗神話の「逆転のH高」に勝つ公立高か。私には考えもつかなかった。

大庄西中学は三年連続「近畿大会出場」の下馬評があった。ところが私達は、予選であっさり負けた。

原因は試合前の口喧嘩だった。自論を通すばかりで、相手チームを倒すよりチーム内を論破することに精力を使うメンバーだった。

「また始まったか」

主将の私は、成す術を知らない。

「このチームはまとまらない」と決めつけた。

「あのH高に勝つと思いましたが？三期連続の近畿大会の夢を潰した弱い私達なのに」とジンは、さらに先生に迫った。

「お前達は、勉強も運動も出来た。

負けず嫌いで、誰でもリーダーになれた。

その分、半端ない個性は魅力があった。

尼西高で結束すれば花が開くかと思つたよ。

私の夢のまた夢よ」

名将は五十年前を思い出して笑つた。

高一の秋。二年のアキさん一人と、私達一年九人のチームが発足した。

その冬。武庫川の土手で事件が起きた。

一年の九人が、百人近い大集団のH高と衝突したのだ。

「今日は逃げへんぞ。

真正面から行ってやる。

何が中学生や。

てのひらで払いやがって」

ナインの意気が上がっている。こうなると手が付けられない。中学の時と同じだ。

H高は野球少年の憧れだけに、その反動が大きい。

事なかれ主義の私も行動を共にすると決めた。衝突を覚悟したなら、見届け役と尻拭いは、中学の時から私の役割と決まっている。

武庫川の間地点へ急いだ。一歩でも二歩でも先で遭遇したい。

闘争本能の成せる業だ。

「やったぞ、うちが先や」

阪急神戸線を先に越えた。正面にH高が迫っているが誰も逃げない。

私も心臓がバクバクと鳴るが不思議と恐怖心はない。

―衝突―

ところが大集団のH高が中央を開け、通り過ぎていく。何事も無かったような静寂が戻った。私は、遠ざかるのを見ながら、全く相手にされないことが虚しかった。

「野球で勝ってやる！」

誰かが叫んだ。泣き声にしか聞こえない。

「おうおう」

全員が呼応した。

その時、半端ない個性がかたまり始めるのを私は見た。

“尼西ミラクル”は半端ない個性の結束がカギなのか…。